Japanese association of educational psychology

個人道徳の発達に関する研究（2）

― 家族関係における自己犠牲と自己優先 ―

○首藤 敏元　・　二宮 克美
（埼玉大学教育学部）　（愛知学院大学情報社会政策学部）

【問題および目的】 自己と他者の幸福を調整する能力および志向性を個人道徳という。自己を社会的関係の中でどのように位置づけるかは，個人道徳の問題である。権威と愛情の関係を共に持つ家族関係の中で，人がどのように自己決定するかは，身近な個人道徳の問題といえる。本研究は，成人の男女を対象に，家族の幸福と自己の要求とが葛藤する場面での判断を検討し，その性差を明らかにする。

【方法】＜被調査者＞浦和市に住む男性 73 名（平均年齢 37 歳）と女性 87 名（同 35 歳）が調査に協力した。男性の全員が常勤の職を持っており，女性の 74 %が専業主婦であった。

＜調査項目＞家族の幸福・要求と自己の要求との葛藤を描いたテーマを 6 種類作成した。それぞれのテーマにつき，主人公が家族のために自己の要求を犠牲にする場面と，家族よりも自己の要求を優先させる場面の 2 種類の物語を作成した。場面の一例は次のとおり。テーマ「夫の親の介護か，仕事かで葛藤する妻」，自己犠牲の場面「Aさんの夫の父親は高齢の上体調を壊し自分で歩くことができなくなった。夫はAさんに父親の介護をしてほしいと思い，Aさんを説得した。Aさんは学校の教師を続けたいと思っていたが，夫の父親の介護のために，教職を辞めて家庭に入った。」，自己優先の場面「（前半省略）Lさんは学校の教師の仕事に生き甲斐を感じており，仕事を続けたいと思っている。しかし，夫は L さんに仕事をやめて父親の介護をしてほしいと思っている。 L さんは仕事を続けることに決め，仕事中は父親の介護を地域の福祉施設に依頼することにした。」

12 の場面ごとに，主人公の葛藤・決心の重要度，自己犠牲の義務の程度（自己犠牲場面）・自己優先の自己決定性（自己優先場面），主人公の決定に伴う満足感の予測，主人公の決定への共感度の 4 つの質問を行った。被調査者はそれぞれの質問に 4 段階で評定した。

【結果および考察】＜場面間の差異＞質問ごとに，自己犠牲と自己優先の 6 場面での得点を合計し，2（性）× 2（場面：犠牲－優先）の ANOVA を行った。すべての質問において，場面の主効果と性×場面の交互作用効果が有意であった。被調査者は自己犠牲よりも自己優先の方が重要であり，主人公の満足感も高く，その決心に共感すると判断した。女性は自己優先の決心を男性よりも重要と判断した。男性は女性よりも自己犠牲の義務を高く評価した。逆に，女性は男性より自己優先の自己決定性を高く評価した。同様の傾向は満足感と共感度においても見出された。つまり，男性は自己犠牲に伴う主人公の満足感を強く予測し，その決心に強く共感すると判断した。女性は自己優先に伴う満足感を強く予測し，その決心に強く共感すると判断した。

＜判断間の相関＞男女とも，自己優先の自己決定性を高く評価するほど，自己優先に伴う主人公の満足感を強く予測した。この関係は，女性（ $r=.614$ ）の方が男性（ $r=.326$ ）よりも強くなる傾向にあった（ $p<.08$ ）。女性において，自己優先の重要性の判断と自己決定に伴う満足感の予測との相関は，自己犠牲の重要性の判断と犠牲に伴う満足感の予測との相関（ $r=.334$ ）よりも，有意に強かった（ $p<.05$ ）。

このように，男女とも自己を犠牲にするよりも自己の要求を優先させる生き方を高く評価していた。その傾向は女性の方に顕著に見られた。これらの結果は，個人道徳の発達と社会文化的環境との関連性を考察する上で重要な示唆を与えている。

＜付記：科研費・基盤研究(C)(2)12610111の補助を受けた＞

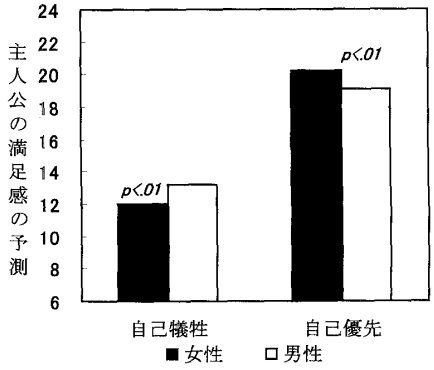

図　決心に伴う主人公の満足感の予測

NII-Electronic Library Service